大連交通大学・国際文化交流学院　留学生　森野昭

■ はじめに

３月から４ヵ月余つづいた授業がおわり、留学生仲間は「帰心矢の如し」そそくさと帰国しました。

一方、我々４人の仲間は、その翌日の７月 13 日から四日間の旅程で中国東北部の名山「長白山」へ旅行しました。長白山は６月に旅行した「丹東」より更に北側、吉林省にあります。標高は 2,500m程度で、富士山より約千メートル低いとはいえ、緯度的には本州の最北端あるいは北海道と同位置にあるので、かなり寒いことを覚悟しなければなりません。

大連駅を午後２時に発った寝台夜行列車は、遼寧省の主要都市、鞍山（重工業都市）・遼陽（日露戦争の激戦地）・瀋陽（遼寧省の省都で昔「奉天」と呼ばれた）・撫順（露天掘り石炭で有名）を通過し、以後ローカル線を通って「松江河駅」には翌朝７時に着きました。以上約 17 時間と、最早日本の JR では経験できない長旅でした。

■ 旅の仲間

今回の旅行では、中国の旅行社が企画したパック旅行に加わったので、参加者は全て中国人、ガイドも中国人でした。寝台列車は「硬臥」で三段式ベッドとなっています（なお、「軟臥」は二段式で料金が高い）。

同行の仲間３人は 67―74 歳の老人留学生あるいは大陸浪人（？）的気風の個性ある面々なので、そのプロフィールを簡単に紹介しましょう。

仲條氏――私と同様に約 10 年の日本語教師歴があり、現在は大連の某日系企業の顧問をしている。中国語にすこぶる堪能で、語学の上達には女学生と仲良くすることが不可欠とうそぶく。74 歳と最長老ながら、毎日、ウイスキー並みの強い酒、白酒（バイチュー）を欠かさない。日式居酒屋で昼と夜の食事をしながら酒を呑み、そこで知り合った企業人と商談が成立するというから、趣味と実益を兼ねているのだろう。

得永氏――67 歳の彼はその風貌のとおり、温厚な性格にして用意周到で着実。今回の旅行の立案や旅行社との折衝は全て彼が引き受けてくれた。若かりし頃は、中近東・東南アジア諸国をまたにかけて活躍した企業戦士だったが、不幸にして四年前に妻に先立たれたので、今は日本よりここ大連の生活の方が楽しいという。

前島氏――信州出身の 70 歳の山男で、痩身にして白髪の顎髭をたくわえている。前歴は企業人だったというが、今は風に吹かれて空間をたゆたうタンポポの種のように飄々と老後を生きている。直言居士にしてユーモアもある。とても日本人の気風には合いそうもない「大陸浪人」の一典型。長白山は良質の「朝鮮人参」の産地。彼は

夏休みに帰郷したときの土産に朝鮮人参をたくさん買い込んでいた。これを焼酎に漬けて晩酌にすると「回春の効果」絶大だという。彼はすでに奥さんを喪っているが、誰を相手に頑張るのか？

（私は、普通の日本人と比べたら自己主張のつよい個性ある人間だと思っていたが、三人を前にすると没個性的な凡人に過ぎないことがわかった。こうして、好漢と旅をしながら交友を深めることができた。）

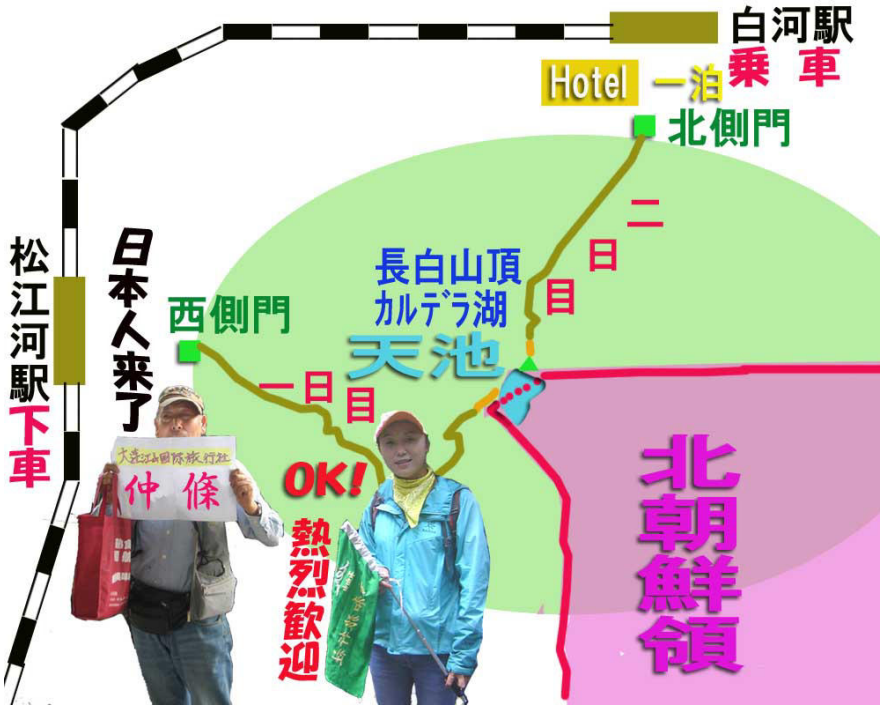
■ 長白山へのルート

17 時間も汽車に揺られて、朝７時に松江河駅で下車しました。

駅前が集合場所で、リーダー格の仲條さんの名前を記したプラカードを掲げて待っていると、すぐにガイド嬢が見つけてくれました。このプラカードを書いた前島さんにカメラを向けると、直立不動の姿勢でポーズをとるのですから、笑ってしまう。

長白山では、一泊二日の日程の中で、目指す「天池」を二日間で西側と北側から各一回、計二回眺めるチャンスがあります。長白山は一年の大半が雪に閉ざされ、６－８月の間だけ登山できるそうです。

しかも、山の天気は移り気で、なかなか天池の絶景を眺めることができないといいます。



ガイド嬢は元気溌剌、歯切れのいい発音だった。

■ 一日目の「天池」アタック

一行はバスで西側門へ行き、そこから登山専用のバスに乗り換えて、山頂の近くまで行きます。そこから、1,442 段の木で組み立てられた階段を登らねばなりません（これは老人の我々にとってはかなりハード）。

階段の脇には残雪がありました。周りの草原には高山植物の花も見られましたが、特に注目するほどではありません。途中から雨が降ってきたので、10 元（165 円）で買い求めた簡易雨合羽を羽織りましたが、そのうちにズボンと靴がずぶ濡れになりました。が、ここまで来て引き返すわけにもいかず、とうとう頂上まで登り詰めました。

そこから「天池」を見下ろしました。が、「天池」はその貌を霧のベールで包み隠し、かすかに岸との境が見分けられる程度でした。参考のために下右図で、晴れた日の「天池」の絶景を紹介します。青く澄んだ湖面と対岸の北朝鮮側の外輪山が美しい。

山頂で三人の仲間を待ちましたが登ってくる気配がありません。携帯電話で確認すると、雨が降ってきたので引き返して山小屋で休憩しながら私を待っているという。

――わざわざ長白山に来たのは、「天池」を見るためではなかったのか！　雨くらいで登山を断念するとは、なんという不覚！

私はそう思ったが、三人は 1,442 段の階段の先に、あこがれの「天池」が待っているのを知らなかったそうです。日頃テニスで鍛えた健脚で 1,442 段の階段を登り切った私は、一番元気者の「年轻人」（若者）であることが証明されたので満足しよう！　だが山小屋に戻るころには、脚が攣って歩けなくなってしまいましたが‥‥。

見上げる空には、雲間から陽光が差しているではありませんか！　山の天気はわからないものです。

つぎに、原生花園、そして大峡谷を見物しました。大峡谷は石灰岩が浸食して形成されたのでしょうから、ここらへんは太古の昔には海底であり、その後隆起したものと思われます。今回は行きませんでしたが、おそらく近くには「鍾乳洞」もあるはずです。この頃から雨が激しく降り、もう散策する気分にはなれませんでした。

再び公園内バスに乗って西側門までもどり、そこから更にバスで明日の入山口（北側門）に通じる「二道白河」という小さな町のホテルに落ち着きました。

２つ星ホテルの部屋はまあまあ綺麗で、私は仲條さんと相部屋になりました。彼は白酒だけでなく、日本製缶ビールをクーラーボックスに入れて持参しています。久しぶりに飲む、よく冷えた「アサヒ・スーパードライ」は喉越し爽やかで、仲條さんの心優しい気配りには感謝しなければなりません。

■ 聖山「長白山」（朝鮮名「白頭山」）の意義

ここで「長白山」の歴史的意義について考えてみましょう。

長白山は中朝の国境にあるために、中朝の歴代王朝の興亡により相互の領土を行き来していました。また、近世になって日本が満州と朝鮮を支配していた末期には、金日成の朝鮮独立運動の拠点が長白山であったことより、この山は北朝鮮にとっては特別な意義があるようです。金日成の息子「金正日」がこの山で生まれたという伝説（？）があり、次頁にあるように記念切手まであります。

このような経緯と朝鮮半島の最高峰であることより、この山は北朝鮮だけでなく韓国でも「白頭山」と呼び、民族の誇りとしているようです。約千年前に大噴火して、崩壊した山頂にカルデラ湖「天池」ができましたが、そのときの火山灰が北海道にまで届いて堆積層を形成し、大噴火の歴史をとどめているといいます。その後も、長白山は約百年の周期で小噴火をくりかえしており、最近、微震が頻発していることより、ここ１，２年のうちに、噴火が起こると地震学者が予測しています。我々の訪問時に噴火が起こらないことを祈るだけです。

金正日は、本当はソ連領内で生まれたので、記念切手にある長白山（白頭山）生まれはウソだという説もある。なお、長白山の天池から北東に流れる「豆満江」は朝鮮側の呼び名で、中国では女真族（清国の支配者満州族）の言葉に由来する「図們江」という（以上、三枚の図はインターネット情報から）。

■ 天池を源流とする三河川（鴨緑江・豆満江・松花江）

６月に訪ねた中朝国境の街「丹東」では「鴨緑江」が満々たる水をたたえている大河に見えました。「松花江」は更に長い川で、支流を集めながら北に流れ、最後に黒竜江（アムール川）へと合流します。しかし大陸国家中国では、なんといっても古代文明発祥の母なる川「黄河」と中国一の大河「長江」の長大さが際だっています。この両河川は世界一長い「アマゾン川」に匹敵します。

それと比べて、日本一の「信濃川」のちっぽけなこと（豆満江よりも短い）！　大陸国家中国と比べて 20 分の１の面積にすぎず、国土が南北に棒状に細長い我が日本では、中央の山脈から川が急流となって海に流れているので、短いのはやむを得ないことです。重厚長大で泥水のような中国の河川と比べて、小さいながらも清流の日本の川――それは日中の全てを象徴的に示していることかもしれません。

それに、中国では河川の汚染、水不足が深刻な問題となっており、中国東北部を流れる三河川も例外ではありません。文字通り＜天の湖＞と呼ばれている美しいカルデラ湖「天池」を源としているにもかかわらず‥‥。

なお日本では、「川」を使い、“河”は「運河」など人工的な川にしか使わず、“江”にも「入り江」など“川”のイメージがありません。一方、中国の“カワ・river”には「川」ではなくて、殆どの場合「江」が使われています。例外は「河」で、元々「黄河」を意味するようです。「黄河」の最大支流で、西安市（かつての長安の都）のほとりを流れている“カワ”も、やはり「渭河」（イガ）と呼ばれています。しかし、中国史が好きな日本人には、太公望「呂尚」が釣り糸を垂れていた「渭水」（イスイ）の方が馴染み深い。始皇帝の暗殺に赴いた刺客「荊軻」の名句「風蕭々として易水寒し。壮士ひとたび去って復た還らず」の中でも「易水」（エキスイ）でした。しかし、現代中国では、川の呼び名に「水」を使うことは希なようです。

■ 二日目の「天池」アタック

ホテルで朝食をすませ、６時半に出発したときには雲間から陽光すら漏れ出ており、今日こそ「天池」の全貌が見届けられると期待に胸ふくらませた矢先に、ぱらぱらと雨が降ってきました。

今日は、北側門から入山しました（写真 **A**）。長白山自然区域内の運行バスに乗り換えて登山口まで行きます。ここから、10 人乗りのジープ（四輪駆動車）に乗り換えます。つづら折りの急斜面をジープは、まるでカーチェイスの映画のように高速で右折左折を繰り返し、その度毎に隣の可愛い娘さんが私にぴったりと体を寄せてくるので、シアワセ～！　こうして約千メートルを一気呵成に登りきりました。

ジープを降りたところから、「天文峰」の頂まで徒歩で数百メートル登ります。山頂やそこへ向かう人の列が米粒大に見えました（写真 **B**）。順番待ちの多くの登山者は、登山口でレンタルした防寒服で頭まですっぽり覆っています。２年前に日本語教師として雲南省の昆明赴任時に、麗江の「玉竜雪山」に登山したときのことを思い出しました。玉竜雪山は5,590mの高山ですが、3,000mまで行くリフトに乗りました。

玉竜雪山は南国の山とはいえ、11 月（初冬）なので防寒服と酸素ボンベをレンタルしました。しかし、快晴のポカポカ陽気にめぐまれたので、防寒服を着ていてはかえって暑いくらいです。もちろん酸素ボンベも無用でした（写真 **C**）。

そんな経験があるので、標高 2,744 メートルのこの夏山でも防寒服など無用だと考えたのです。前日も雨ガッパで十分でした。ところが登山の順番待ちをしている間に、強風と共に雹（ひょう）が降ってきて一気に冷え込みました（写真 **D**）。寒さに凍えながら頂上にたどりつき、「天地」を眺めると、濃霧に閉ざされて何も見えません（左図）。山頂に永く留まっていては凍え死にそうです。さっそく下山しました。遅れてやってきた三人が見た天池は右図です。わずかな時間差でかくも違うものか！――残念無念、これが山というものでしょうか。

麓にもどったところで、トラブルが発生しました。ガイドの指示した集合場所が分からなくなってしまったのです。ここからが仲條さんの出番です。中国語が堪能な彼は、携帯電話でガイドに事情を説明したところ、旅行社の職員が迎えにきてくれました（ガイド嬢に 100 元＜1650 円＞のチップを包んだ御利益もあったか？）。実は、今回の旅行を立案した得永さんは、仲條さんが不参加なら旅行はとり止めにするといいました。私より中国語が堪能な得永さんや前島さんですら、日本語の通じない中国の旅行団に加わるときには、このくらいの慎重さが必要なのでしょう。私も中国で何度も旅をしましたが、必ず中国人の日本語科学生に同伴してもらいまいた。

その点では、日本人ガイド付きの日本からの「海外旅行」は優雅なものです。五つ星ホテルに泊まり、空調つきの寝台列車に乗り、バス旅行では途中の休憩所には清潔なドア付きトイレあり、などなど至れりつくせりです。

次に「長白山瀑布」を見物しました。滝そのものはさほど大きくありませんが、背景が雄大で見応えがありました。近くに温泉が湧出しており、半熟の温泉卵を食べました。温泉の湯舟につかって疲れをいやしたいところですが、時間がありません。最後に、「緑淵潭」（文字通り沼が緑色の神秘的な色を帯びている）を訪問して長白山旅行の日程を終えました。

夕方、白河駅５時 37 分発の寝台列車に乗り、翌日昼過ぎに無事大連にもどりました。ついでながら、列車は予定より 20 分遅れで発車しましたが、駅員から事情説明はいっさいありません。これなど、まだいい方で、数時間待たされた乗客が騒ぎだしても、駅員は「知らない」ですから。中国の公務員は（店員も）、人民（客）へ奉仕するという発想が欠けています。「お客様は神様です」という日本的発想の対極にあり、それは共産主義によるものか、中国の歴史的伝統によるものか？　（了）

● 旅行余話（旅は道連れ、世は情け）

旅行中二つのグループの中国人と親しくなりました。
彼らは、私が三人と離ればなれになったときには、行方を心配してくれました。また、長白山瀑布へはガイドの代わりに、我々に付き添ってくれました。

滝まで一緒に行った得永さんが撮影

さて、帰りの列車に乗ったとたん、三人は泥のように寝込んでしまいました。二日間の登山の疲れが出たためでしょうが、夕食時になっても目覚める様子がない。
独り取り残された私は、暇を持て余していたのですが、そのうちにいい話相手がみつかりました。
寝台の二段目で仲良く話している中国人の二人の児童がいました。中国語を話す練習にはかっこうの相手です。
長白山観光の帰りで、瀋陽で降りるといいます。はじめは中国語で話していたのですが、簡単な英語も話せることがわかり、驚きました。左の男の子の英語の先生はアメリカ人の Williames だといいます。一人っ子政策の中国では、親が子の教育に熱心です。それでいて、二人の母親はいずれも英語がぜんぜん話せませんでした。
日本でも小学校に英語教育を導入することが議論されていますが、中国ではすでに始まっていると聞いております。

元気者の小学生

ふと思いついて、杜牧の「清明」（私が暗唱できる唯一の漢詩）の第一句を朗誦しました。
——清明时节雨粉粉 Qing ming shi jie yu fen fen
すると、どうでしょう、二人はそれに続いて第四句まで、すらすらと朗誦してのけました。
が、これは驚くにはあたりません。私が日本語教師時代にも、教え子が日本人の知っている漢詩くらいなら、すらすらと朗誦することを知っているからです。中国の学校教育では、民族が誇るべき漢詩を小学生に教え込むことになっているのです。それは、家庭で方言を話していた子供に、小学校に入ったら「普通話（共通語）」を教える教育方針と一体になっているのでしょう。

わたしには、このような中国の文化教育政策がうらやましい。日本の小学生に、西行の桜にまつわる和歌の一首、あるいは藤村の若菜集のひとつでも、朗誦できる子が何人いるでしょうか？
子供の傍らには母親が与えた童話の本がありました。それを開いてみると、全頁簡体字がびっしり詰まっており、私が使っている中国語のテキストより難しそうです。漢字の上にピンインが付されているので読んでみると、さっそく発音を直されました。７、８歳の子供に指導されているのだから、悔しいやら外国語の学習がいかに難しいことかを、71 歳の老人の私は思い知らされたのです。
それならばと、私はリュックサックの中から「囲碁」の本を取り出して、子供に見せました。もちろん、彼らには理解できないでしょうが、漢字仮名交じり文の所々にある漢字は分かるようです。
そのうちに、子供たちは私との会話に飽きて、トランプゲームに熱中しだしました。母親が与えた童話の本よりカードゲームの方が面白いのは当然でしょう。ときに声を荒げて張り合っている二人の真剣なまなざしを眺めていると、微笑ましくなって日本にいる二人の孫を思い出しました。

我がベッドの隣にいる仲條さんは依然、深い眠りの中にいます。一方、私は列車が停まるたびに、駅名と時間をノートに記録している。彼は始発駅「白河」から明日「大連」まで眠り続けるつもりか？
それでは正に、「白河夜船」ならぬ「白河夜汽車」だね。

【追記】70 歳以上の前島さんと私は、門票（入山料）が無料になり、当初の旅行費（1080 元<約 1 万 8 千円>）から 250 元も安くなりました（74 歳の仲條さんは、パスポートのコピーしかないので有料）。気の毒なのは 67 歳の得永さんで、学割で半額しか戻らなかった。中国では老人と軍人が優遇されているが、外国人も対象となったのは幸運でした。
嗚呼、快晴の「天池」を見たかった。が、「雹」が降って凍え死にしそうになった思い出は一生忘れないでしょう！